
私は、彼を好きになった。

田原 ともき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私は、彼を好きになった。

【コード】

N9700P

【作者名】

田原 ともき

【あらすじ】

平凡な主人公ちかが初めての恋をするお話。

私は電車に乗って目的地を目指した。
運命だったのかもしれない。

彼に出会ったのは私が社会人になって2年目だった
仕事にもなれ、やっと接客業という仕事にも自身が持てるようにな
った頃親友の亜理紗が気晴らしにと誘ってくれた。

あたしはもともと社交的ではなかった

亜理紗は小さい頃からの親友

彼女は私の知る限りの人間の中でだれよりも完璧だった。

容姿、性格ともにあこがれる存在。頭も良く運動神経も抜群で言う
ことナシといった感じだろう。

彼女は私に優しくかった。

子供ながらに最初はおもった。

・・・彼女はあたしに優しくしているけど何か裏があるんじゃないか
いか・・・

・・・もしかしたらあたしに優しくして周りからの評価を上げよ
うとしているんじゃないか・・・

でもちがった。

彼女はいつまでも優しくかった。

何の特徴もない私と仲良くしてくれた。

私は世間で言ういじめられっこだった。

何をしたわけでもないのにいじめにあっていた。

女子特有のいじめ。

最近テレビでよくいじめにあって自殺。なんていうニュースをよく耳にする。

私の学生の頃もシカトや何かを隠すなどあったが、現代に見受けられる暴力的なもの、陰湿なものはそこまでひどくなかった気がする。

女子にはグループがあったりする。

クラスに1人はリーダーみたいな女の子がいたりするもので、わたしはその子の標的になってしまった。

仲の良かった女子まで私の周りから離れていった。

シカトというやつだ。みんな彼女に言われて、私をシカトした。

万が一彼女の言うことを聞かなかったら。次は自分がいじめられてしまう。

一人になるのが怖い。

みんなそんな心理が働いたのだろうか。

いうことを聞かなかったからといって、彼女に何ができるだろうか。亜理紗みたいに可愛いわけでもないのに、頭が言い訳でもないのになぜ、彼女なんかにいじめられなければならないのか。

亜理紗にいじめられるなら仕方ない、ほかの女子も従うのは仕方ないことだと納得できたかもしれない。

いじめられながらも私はそんなことを冷静に考えるような子供だった。

理由は幼馴染の男の子、遙だった。

彼にはいじめられている理由なんていえなかった。

おまえの所為だなんて。

私はあの頃遙が好きだった。

好きというかあの年頃なら憧れに近かったのかもしれない。

私をいじめていた子もそうだったのだ。
遙が好きだったのだ。

でもそのいじめはあまり私には効果がなかった。
あの頃の私は周りの行動にあまり興味がないから。
そのうちいじめもおさまった。

いじめをしていた彼女は遙と仲の良い私に嫉妬していたのだろう
今考えればそう思える
でもあの頃のあたしは違っていた。
あの時期からだ、私が遙を避けるようになったのは。

あの頃一度だけ亜理紗に

「ねえ、なんで私と仲良くしてくれるの？」

一度だけ聞いた。

「あたしといたって楽しくないでしょ？ 亜理紗はかわいいし頭も
いい、あたしなんか……」

「なにいつてんの？ あたしが誰と一緒にいたっていいでしょ。あ
たしはあんたのこと気に入ってたんだから」

「ねえ、あたしのいい所ってどこ??」

「うーん…… まあいろいろよ。しいて言えばその何にも興
味なさそうなところとか（笑）」

「ばかっ！！ それ、ほめてないから。」

亜理紗に誘われて人生はじめてのライブハウスに行った

興味がなかったわけではなく今までに行く機会がなかったのだ。
仕事の後、待ち合わせていた下北沢に急いで向かう

亜理紗は人脈も広く友達も多い

この日は当時の彼氏ヒロトのイベントらしく、彼にもあってほしいと誘われた。

電車に乗っている間少しドキドキした。

いつもの自分と違ったことをするのは勇気がある
もともといろいろ好きな音楽が好きなたしは
ライブがどんなものなのか、どんな曲が聴けるのかワクワクしていた。

想像したのはよくテレビで見るような大規模なライブ

有名なバンドなどが、ステージで歌う

若者達は立てのりで騒いで一緒にうたう

想像するだけで早く見たいと好奇心にかられた。

電車を降りて亜理紗に連絡する

・・・

繋がらない

どうしよう

事前にメールできてたライブハウスの場所を確認する。

前に下北沢に来たのはいつだろうか、記憶の端にも残っていない下北沢の地形

なんとなく南口に下りてみる。

長い階段を下りたところで、キャッチといわれる人やティッシュ配りの人が押しよせてきた。

金曜の夜ということもあり騒がしい

なんだ、渋谷や新宿と変わらない

こうゆう感じは苦手

亜理紗と連絡も取れないし帰りたい…………

いや、ここまでできてしまったのだから行くしかない

今日だけ。

今日だけががんばろう。

久々に亜理紗に会えるし、亜理紗の新しい彼氏も一度ぐらいは見ておきたい。。

ケータイを片手にライブハウスまでの道のりを急いだ。

商店街らしきところをぬけて、看板を探す。

この辺かな・・・・・・・・

亜理紗だ！ もしもし？

もしもあたし！！ ごめんね電話出れなくてっ いまどこ？

多分ライブハウスの近く。 コンビニのところにいるんだけど、
あってるかな？

あってるあってる！！ その隣のビル、地下に下りる階段あるから降りておいで！ 中で待ってるから。

電話を切って向かう。
壁まで黒く塗られた通路に、ここであっているのかと少し不安になる。

入り口にあるカウンター いかにもって感じの人が2人。

「どのバンドみにきたの？なまえは？」

・・・・・・・・しまった。何も聞いてない。

「あ・・・・・・・・あたし亜理紗の友達で・・・・・・・・」

「ありさ？？」

「あ・・・・・・・・ヒロトさん言う方の彼女で・・・・・・・・」

「?? ちよつとまっつて。今確認するから。」

.....

どうしよう。こつゆづの苦手。

ホントにここで合ってるのかな.....
しばらくすると奥から男の人が戻ってきた。

「お待たせしました。ちかちゃん?」

「あつ はい。そうです。」

「じゃあこのまま入っておくの左の扉だから。ヒロトも亜理紗ちゃんもいるから。」

「あつ。ありがとうございます。」

奥に進むと、また黒い。

なんだか厚そうな扉。その向こうからはロックだと思われる爆音。
この状況で、この音量ならあけたらすごい音なんだろうな.....
扉に似合った太いレバーに手をかける。

あれ?? かたいっ!!開かないんだけど!!

.....

「すみません..... はいらないの??」

後ろから男に人に声をかけられた。

「すみませんっつ！！　なんか開かなくてっつ」

どうしよう・・・はずかしい・・・

こうゆう状況は一番苦手、自分が恥をかくのは嫌。絶対馬鹿だと思われてるんだろっつな・・・

ふっ・・・

少し笑った男の人は横から扉に手をのばした。　ガチャ・・・

・・・　ジャカジャカツ！！　ダンダンツ　爆音が通路に広がった。

そっゆうことね、下に回してから押すのね・・・　恥だわ。

「どうぞ。レディーファースト。・・・」

「・・・ありがとうございます。・・・」

彼の開けてくれた扉に体を滑り込ませる。

はじめての世界　いろんな色のライトが体に突き刺さる。一瞬クラツときた。

ステージと思われる少し段が上がったところには見たこともない4人組のバンドが音を出している。

その前には学生なんじゃないかと思う若者たちが、ギューギュートステージに詰め寄っている。

この光景は予想どおり。
でも想像したより狭い感じだな・・・

「大丈夫？」

「はい。すいません大丈夫です。」

まだ後ろにいた彼が声をかけてくれた。 たぶん邪魔なんだろう。
後ろのほうつにいこう。

「ちか〜っつ〜!!」

大きな音の中からかすかに亜理紗の声が聞こえた。

まぶしいライトをよけて亜理紗の顔を探す。

前のほうから亜理紗がこっちに向かってくる。

久々に会った亜理紗は変わらず可愛かった。 いや前より綺麗にもみえた。

「よく一人で来れたねー!! 迷わなかった??? てかその格好・・・」

「仕方ないじゃん、仕事帰りだもん。 ってか先入ってるならちゃんといつてよ!! あたし入り口でテンパッタよ!!」

「笑 やっぱり そうなるかと思って先はいつてみた。

新しい体験もたのしいでしょ。

わらって亜里沙は言う。」

「なんか飲む??」

後ろからモデルみただけで少し怖そうな男の人が私たちに声をかけてきた。

「ちか、彼がヒロトだよ。今日のイベントは彼が開いたの。」

「はじめまして、亜理紗の友達のちかです。今日はこんな格好できてすいません、お招きいただいてありがとうございます。」

「なに業務的になってんのっ!!なんかのむ??」

「ちかちゃんはじめまして、亜理紗から話はきいてたんだ。亜理紗の昔からの親友でしょ?今日は来てくれてありがとう。亜理紗の外の友達連れてくるのはじめてだからうれしいよ。俺飲み物買ってくるから、酒飲める??」

「私はうんうんとうなずいた。以外にもやさしい感じでほっとした。」

「あれ?ゆうき、おまえもうすぐじゃねーの?」

ヒロトさんはあたしの後ろに目をやった。

「うん、これから準備するところ。」

ゆうき?さつき扉を開けてくれたひとかな?

そのまま彼とヒロトさんはプライベートと書かれた扉へはいつていった。

久々にあった私たちはたわいもない話しをしながらヒロトさんの買ってくれたお酒と、若い音楽を楽しんだ。

また次のバンドが出てきた。

深い血のような真つ赤なライトにてらされた3人。

低いベースの音が始まる

ドラムの音ギターの音が重なり合う

あれ？真ん中にマイク？？

覗き込んでみると横の扉からクタクタのTシャツをきた華奢な感じの男の子が出てきた。

マイクをつかみとり彼の声が音に重なり合う。

わああ・・・ かつこいいかも・・・

続けて何曲か歌い終わると、ボーカルの男の子がMCを始めた
気づくと箱の中の観客はステージ前に押し寄せていた。

「あつ どうも、こんばんは。

みんな夜遅くなのに集まってくれてありがとうございます。今日
はこの企画をしてきているヒロト、呼んでくれてありがとうございます。
います。

まだまだ今日は長いので楽しんでください。 では次の曲。」

彼らは人気があるのだろう、ライブハウスもおおいに盛り上がって
いる。

そして何曲か歌ってそれ以上に会場をわかせていた。

最後になりヒロトさんがステージに立つ。

「みんな今日は本当に集まってくれてありがとう。 またこの企画
やりたいと思うんで楽しみにしてください。

そして、今日出てくれたバンドのみんな、ありがとう。またよろしくな。」

イベントが終わってから、そのまま帰ろうとするあたしを亜理紗が引き止める。

「今帰っても電車ないよ？」

「大丈夫、タクシーで帰れる距離だし、亜理紗もヒロトさんと帰るでしょ？」

まだ人の多いフロアの中を掻き分け出口を目指す。

「ちかちゃん。この後打ち上げあるんだけどおれらと行かない？
亜理紗もくるし。」

ほかのやつらはさっきバンドで出てた奴とか、悪い奴はいないし。

「

ヒロトさんが声をかけてきた。でもあたしはあまり大勢でのみに行くのは好きじゃない。知らない人と飲みに行くのはツライ。

「ちか〜行こうよ。明日はどうせ休みでしょ？あたしもちかいな
いと寂しいし〜」

甘えた声を出す亜理紗は最高に可愛い。こんなに可愛く頼まれたら断れるわけがない。

結局打ち上げをやる飲み屋に流れ込んでしまった。

居酒屋は見渡すとほとんどが男の子ばかりの飲み会になっていた。

そっか、バンドやってる人って男の子が多いんだなと今更ながら気づく。

周りの人も気を遣って話しかけてくれる。

あたしの隣にさっきまでいた亜理紗は気づけばヒロトさんの横に移動していた。

ヒロトさんって年上だよな?? かつこいいし優しそうだし、亜理紗はいいのつかまえたな。

なんだか新しい空気が吸いたくなって、あたしは1人外にでた。

夏でも夜は涼しいなあ。

近くにあった自販機の横にしゃがみこみ、今日のはじめてのタバコを取り出し火をつける。このクラツと来る感じがいつもなら嫌な感じだが、なんだか心地よかった。

何本目だろうか、またタバコに火をつけると男の子が声をかけてきた。

「ヒロトさんと亜理紗ちゃんが探してたよ。」

見上げてみたけど、お酒のせいか視界が曇る。

「あっ、すみません。これ吸ったら戻るんで。」

一言いってタバコに目を戻す。

すると男の子は隣に座ってきた。

.....

何これ、どうしたらいいの？

「あの・・・タバコ吸いますか？吸わない人だったらゴメンナサイ。

」

「いや、ライブ終わったし吸いたくなかった。」

そう言ってくれて一安心。タバコを取り出し火をつけてあげた。

どうもと彼は一言いってタバコを吸う。

「あのさ、ライブとかよく来るの？今日は楽しかった？」

「実は初めてだったんです。あたし仕事してるし、夜はいつもお家にいるんですけど、今日は亜理紗に呼ばれてきたんです。ヒロトさんのイベントがあるからって。」

途中から来たからもしかしたらあなたのバンドは見てないかも知れないけど。楽しかったですよ。

最後のほうにやってたバンドとか、バンド名とか全然わからないけど、四人組だったかな？赤いライトが印象的だった、あの人たちは有名な人なの？

前の方混んでて見えなかったけど、なんか好きな感じだった。」

しゃべりすぎたと思った。 恥ずかしくて彼のほうを見れない。

「良かったらまたライブ見に来てね。
また楽しんでもらいたいし。」

「えっと……機会があれば……
あの。先に戻ります
ね。」

そういつてあたしは彼とおいてお店に戻った。

亜理紗とヒロトさんと話をして気づくと朝になりそろそろ帰ろうと、
みんなでお店を出た。

始発まで一緒にいると言ってくれた亜理紗とヒロトさんにさよなら
を言って駅に向かう。なんだか1人になりたかった。

始発まで後一時間か……

ロータリーを見渡すと酔っ払って騒いでる若者、いちちゃっているカ
ップル、浮浪者。

あたしもその中に混じり始発をまつ。

夏の朝の風は寒さを誘う。

「始発まつてんの？」

男性はあたしの横に腰掛けた。

そのうちどこかに行くだろうと、あたしはシカトしてみる。

「俺だよ、さっき外で話したじゃん。」

何となく聞き覚えがある声だったので、彼のほうを見る。ライトに照らされた彼の顔はとても綺麗で男らしい顔立ちでなんともいえなかった。

初めてちゃんと見た。

「あつ・・・あの時ドアを開けてくれた・・・
あの時暗くてよく見えなかったんです。すみません。」

「あのさ、外で話したとき連絡先聞きたかったんだけど・・・
先に戻っちゃったからさ。良かったらまたライブ来てほしいし教えてくれない？メアドとか・・・」

彼の綺麗な顔に見惚れて何を言われてるか最初はわからなかった。
綺麗な彼の顔が苦笑いする。

「俺の顔なんかついてる？」

「つつ！！すみません！！連絡先ですよね。」

急いでカバンの中からケータイを取り出した。

その後はたわいもない話をて、気づけば電車の動く音がしている。

「もう始発過ぎちゃいましたね。電車のりますよね？」

「いや、俺この近くに住んでるから。」

「すみません。なんか一緒に待っていてくれてたんですか??本当にすみません。」

謝ってばかりだね。と彼に笑われた。

「ほら、女の子1人だとあぶないかし。俺も良い覺ましにちょうど良かったよ。俺、雄樹ってゆうんだ。連絡するから。」

綺麗な彼の笑顔から笑顔がこぼれる。

素敵過ぎる彼の笑顔はあたしの心をキュンと締め付ける。

お礼を言っ、手を振る彼を後ろにあたしはホームに向かった。

家についてベットに吸い込まれるようにそのまま眠りに着いた。目が覚めたときにはもう夜近くになっていた。

顔元でケータイのランプが光る。

「ちか。だいじょうぶ？ちゃんと家に着いてる？？心配だから連絡ちょうだい！！」

あつた後は必ず連絡をくれる亜理紗の心遣いはすばらしいと思う。家路に着いたことをちゃんと返信する。

もう1件は……

ヒロトさんだった。亜理紗からきいたんだろう。少しがっかりした自分がいた。

シャワーを浴び、昨日のお酒とタバコの匂いを落とす。外を見ながら。ああ、また同じような日が続くんだとふと思った。

ヴヴー ヴヴー 携帯がなる。

『どうも、雄樹です。まだ寝てるかな？酔いは醒めたかな？昨日はライブ来てくれてありがとう。もし良かったらまた来てな。一応連絡先教えときます。09045……』

彼からだ。

少しドキドキした。うつすらと顔を思い出す。

この年になって知り合いが増えるとは思わなかった。しかも若い男の子……なんだか自分まで若くなった気分になる。

雄樹くんか……。彼いくつかな、これって返信したほうがいいよね？でもなんて返す？私も番号教えたほうがいいのかな……。色々考えてたら返すのが面倒になって、いったんおいておくことにした。

気づけばあれから日がたっていた。ちょうどあの週末から一週間。ポケットで携帯が振るえる。

ヒロトさん？

「ちかちゃん久しぶり。今日イベントあるんだけど来る？前にちかちゃんが言ってたバンドのやつらが出るんだけど、多分こいつらだと思っただよ。亜理紗は撮影でこれるかわかんないんだけどどう？」

亜理紗はモデルをやっている。

有名なトップモデルとかではないけれど、何をやっても続かない亜理紗には趣味程度の仕事があっているのかもしれない。

「私も今日は仕事なんです。なんじからですか？いけばいきたいです。」

「多分やつらは9時ぐらいだから。一応チケット取っとくから入り口で名前言つて。なんかあったら俺に連絡してね。」

今日いけるかな・・・でも1人だと辛いな。ヒロトさんってやつぱりやさしいな。気が利くというかお兄さんって感じかな。

あっ・・・雄樹君に連絡しないと。

また携帯を取り出し文字を打つ。

「ちかです。返信遅くてすみません。今日またライブに行くかもしれないです。あたしが気になってたバンドのライブがあるみたい・・・仕事なので間に合えば行って来ます。ではまた。」

なんか報告みたいになってしまった。でもなんて送っていいのかわからない。

仕事も終わり、時間もあつたのでヒロトさんに教えてもらったライブハウスに向かう。新宿という都心は夜になっても明るかった。

大通りに立つビルの地下、ここだけは場違いな感じのつくり。

ライブハウスって地下が多いなあ。

入り口で名前を告げて中へ入り込む。

すでにライブははじまっていた。誰だかわからないけど何となく前を見たことのある人もいる。

何組目かはわからないけど見覚えのあるバンド。
メンバーがステージに立ち真ん中にはマイクが1本。

あっ……あの人たちだ。

曲が始まると、前みたいに人が一気にステージに押し寄せせる。

赤くなったステージの脇から男の子が出てきてマイクを掴む。
爆音に負けない彼の声。激しい動きがフロアを巻き込む。

盛り上がる若い子達に巻き込まれ私もその中に引きずり込まれてしまった。

苦しい、早く横に逃げなきゃ。

激しい曲が終わりみんなの動きが落ち着いたとき、ふとステージに目をやるとボーカルの男の子と目があった気がした。

あれ……？

ゆうき……くん??

もつとちゃんと見たかったけど人だからでみえない。
人に溺れそうになったあたしを横からヒロトさんが助けてくれた。

「大丈夫？このバンド結構売れてきてるから危ないよ（笑）」

「あの……あの人って……」

「ああ雄樹？　今頃気付いた？」

笑いながらヒロトさんが言う。

「あの日声かけられたでしょ？俺があいつに言ったんだよ。ちかちやんいきなり外行っちゃうし、あいつ人見知りで暇してたから。見に行けって。」

ああ、そうゆう事か。なんだか納得してしまった。

「すみませんんだかきを使わせてしまって……」

ステージの彼を見た。

歌っている姿はあの時とまた違ったキラキラした彼で、なんとも妖艶で美しかった。

なんだか急に恥ずかしくなってステージから見えないところに隠れる。

雄樹君のバンドが終わってフロアが明るくなる。

どうしよう、帰ろうかな。

知り合いのいない私は自分の居場所をなくして外に出た。

ライブハウスの周りにはザワザワと人がいる。雄樹君のバンドのメンバーも見かけた。その間をすり抜けて駅にむかう。

「ちかちゃん!!」

無意識にその声に反応して振り向くと汗だくの雄樹くんがいた。

「あの……あたし知らなくて……ゴメンナサイ。」

「いや、別に謝ることじゃないし。言わなかった俺もさ……ね？」

自分でも何に謝っているのかわからなかった。

「あのさ、明日休み？今日も打ち上げあるしもしよかったら戻らない??ヒロトもくるし、亜里紗ちゃんは今日はいないの?」

「亜里紗は仕事なんです。だから……1人で参加するのはちよつと。」

「……そうだよね、ごめん。」

なんだかこの感じがたまらなく嫌で、彼にさよならを言って足早に駅に向かった。

電車に乗り込みメールが来ていることに気付く。

「ちかまだいる?あたしこれから向かうよー いるならヒロトにも言っというて。あいつ電話でないからあゝ!!」

はあ〜。 亜理紗遅いよ。

「ごめん、今電車乗っちゃったよ。ヒロトさんにも言わずに出てきちゃったからお礼言っとして。」

「めずらしいじゃん。どうしたの？なんかあった？」

「なんもないよ、今度ゆっくり会おう」

亜理紗の勘の鋭さは怖い。なにがあったわけではないけどなんだかもやもやしている。

早くお家に帰ってシャワーを浴びたい。そう思いながら最寄り駅までの時間目をとじた。

あの日以来の彼からのメール

「土曜日ライブやるからよかったら来て。名前入れとくから。」

「はい」とだけメールを返し、ため息をつく。

はあ

彼の事が頭から離れない。この気持ちは何なのか。わかってる。わかってるけど認めるのが怖い。

土曜日はすぐにやってきてしまった。

まだ始まる前ありさと話す。

「ちか、雄樹君といつの間になかよくなってたの？ヒロトから何となく聞いたよ〜!!」

「そんな仲いいほどじゃないよ、一度ご飯は一緒に食べたけど何にもないし、今日だって久々にメールきたから……」

「何いってんの 気になってるくせにい。ちかは素直じゃないからなあ〜。このひねくれ者〜。」

笑いながら私のホッペを引っ張る。

私は勘がいいんだぞ」と笑いながら亜理紗は言うが、本当そのとうりだ。気にならないわけがない。

あんなに綺麗でかつこいい彼を気にならない人なんていないと思う。そのとうり今日のライブにも彼目当てであるう女子が大勢かんじとれた。

今日は彼のバンドのワンマンらしい。

これだけの人数を集められるバンドは中々今はいないとヒロトさんが言っていた。

ステージが赤く照らされていく

深い赤

みんなライトに吸い込まれるように前に集まっていく。もうあの人がみに入りたくないと後ろのほうに下がった。みんなが雄樹君の登場を待つ。

……あれ？ 出てこない。

フロアもおかしいとざわつきはじめた。

後ろかな……

ヒロトさんがニヤつきながら言ったそのとき。

バンツ！！

後ろのドアがあいて雄樹君が飛び出してきた。

目の周りが黒く塗られて印象的。
フロアの人だかりが一気に後ろに流れる。

危ない！！

思ったらずくに彼が人ごみを掻き分けてステージへと向かった。
あたしも人に飲まれて連れて行かれる。

フロアの盛り上がりは終始絶好調だった。隙を見て横に逃げたが
たしまで汗だくになってしまった。

大丈夫？亜理紗が声をかけてくれる。

こんなに盛り上がるバンドだとは思わなかった。彼等から飛び散る
汗はなんだか清々しくてパワーがあった。

途中で雄樹君がTシャツをぬぐう。

見惚れていると目が合つてにやつと笑う彼。

そのままあたしの顔にTシャツが投げつけられた。

ぼふっ！！

顔に当たってそのまま地面に落ちる。一瞬何が起こったかわからな
かった。

Tシャツに女の子たちが群がる。

もみくちゃになりながら逃げるあたし。ステージで歌いながら笑っ
ている雄樹君を睨む。

ライブも終わって早々に帰ろうとした。

亜理紗に打ち上げに誘われたが行く気がしなかった。ライブをみて
いる自分が雄樹君を見ている自分が、恋している錯覚が嫌だった。

外に出るといつものようにバンドメンバーがファンの子達に挨拶をしている。

あたしも顔見知りになったので、お礼だけは言って足早に駅にむかった。

タバコ・・・吸いたい。

ふと思って帰り道の公演に立ち寄る。携帯が着信を知らせているのはわかっていた。でもとる気にはなれない。

亜理紗かな・・・・・・・・
もしかしたら。

思いながらも知らないふりをしてタバコに火をつける。

ふう。息を吐いた瞬間に目に入ってきたものにびっくりした。

ゆうき・・・・・・・・くん？

「何でかえんの？俺すぐ外出たのに電話も出ないし。」

「ごめんなさい。人が多くて苦しくなっちゃって。電話は・・・・・・・・
・気付かなくて。」

嘘にしか聞こえない言い訳をならべる。

「戻らない？打ち上げもあるし。」

「今日は帰ります。体調よくないし、ほら雄樹君は早く戻ってくだ

さい。みんな待ってますよ?」

.....

「タバコ1本くれない?」

彼がそう言うから手に持っていた箱とライターを差し出す。

一息つく、「今日たのしかった?」

「はい」

「俺が後ろから出てきてびっくりした?」

「そりゃもう」

嬉しそうに彼が笑う。なんだか悲しくなってきた。こうやって話していても遠い存在に感じて、でもこんなに近くにいて手を伸ばせば触れる距離なのに。

「あの、そろそろ戻った方がいいんじゃない。あたしなら別にほっといてもらっていいんで。」

「わかったと言ってライブハウスに戻る彼の後姿を目で追い続ける。」

「雄樹どこ行ってたんだよ。」

戻ると入り口でメンバーがまっていた。よくきてくれる子もチラホラ残ってくれている。

「ゆうき〜！！今日もかつこよかったあ！」

褒められるのは正直うれしい。でもなんだか物足りない。自分がわがままになってきたのか、バンドが嫌なわけではない。

打ち上げに向かい酒を交わす。ほとんど見慣れたメンバーだから安心する。亜里沙ちゃんが隣に座ってきた。

「ちか連れて来れなくてごめんねー。あの子一度言い出すと曲げない頑固者だからあ。」

ケラケラと笑いながら俺をたたく。別にと返すが、正直寂しかった。知り合っただけだから仕方ないかもしれないが、少し話がしたかった。

明日仕事か？いや、普通なら休みだ。本当に体調が悪かったのか？

「おい百面相。」

ヒロトに頭を叩かれた。

「お前らのうちあげだろ？もつと楽しみめよ、ちかちゃんいないからって拗ねるなよ。もっかい呼んでみる？」

「いや、さっき話したから。電車乗ったと思う。」

そんな俺たちの話を聞いていた周りが面白そうだと割り込んできた。

「なになに？雄樹、お気に入りの子いんの？」

「雄樹に彼女？」

周りがざわつく。

「でも気をつけるよー。お前もてんだから。ファンの子に手えだすと、他のファンからその子攻撃されるぞ〜。」

なんだそれ、俺はちかちゃんのこと気にいつてんのか？ってか彼女は俺のファンなのか？

うつせえ。と笑いながらごまかし、目の前にあったビールを飲み干した。

俺はどうしたいんだ？

あの日以来亜理紗がよくライブに誘ってくれる。でも何かと理由をつけて断った。ごめん。

会いたくなかった、雄樹君にもヒロトさんにもライブであった人達に。

あたしなんかが行くところじゃなかった。だから消したかった、ふとした瞬間に思い出すあの楽しい感じ、雄樹君の笑顔。

思い出したくなかった。今までの平凡な生活が惨めに感じるから。

たまにくる雄樹君からのライブのお誘いも、本当は行きたかった。でも行った後の後悔を思い出すと悲しくなって、メールも返せなかった。

普通に仕事に行って定時に帰る。たまの残業。

それでよかった、あたしのに日常なんてそんなもの。キラキラしたものなんてなくていい。

あつた分だけ動揺するのは嫌だった。

亜理紗からライブ以外のお誘いがあった。

仕事帰り亜理紗の家で宅のみ。買出しをして亜理紗の家に向かう。

「久しぶり」。ちかぜんぜん会ってくれなかったから寂しかったよ」。

「ごめんごめん、最近忙しかったのよ。お詫びに美味しい物作るからゆるして?」

「わ〜い！！それ目当てで宅のみにしたんだから！」

キッチンを借りて亜理紗の好きなものを作っていく。

「ちかつてさ、昔から料理うまいよね。やっぱり毎日していると違うのかな。」

「あたしは仕方なくやってるだけだし、これくらいみんなできるよ、亜理紗もヒロトさんのために作ってあげれば？」

「ヒロトの方が上手だからいいの！！うまい人が作ったほうがいいんだから、私は食べる専門って事で。」

亜理紗といると落ち着く。この子はあたしの存在をいつでも大事にしてくれる。

でも無理に入ってこない。この感覚は安心する。

私が昔から料理をしていることにだってあまり突っ込んでこない。だから昔一度だけ話した。

私には家族がない。

いない訳ではなかったが一緒に住んでいなかった。

小さい頃母親が事故でなくなり、父親と姉と三人で暮らしていた。でも私はおばあちゃんの所に引き取られた。

たぶん生活が苦しかったんだろう。

おばあちゃんももう年だから1人しか引き取れないと言ったらしい。だから私だけ引き取ったんだと後から聞かされた。

おばあちゃんはとても優しくても居候のあたしは何でもした。しなくて言いと言われたけど、肩身が狭かった。

今ではそのおばあちゃんもいない。私が就職した年だった。社会にでた私を見て安心したのだろう。暑い夏の夜、縁側でた倒れていた。最初見たときは寝ているのかと思うほど優しい顔だった。

遺言などはなかった。親戚が全部おばあちゃんの物を処分した。

そこにお父さんは来なかった。

淋しかったけど、探そうとは思わなかった。今更あってどうしていいかわからないから。

初めての1人暮らし。このとき初めて亜理紗を頼った。どうしていいかわからない私を亜理紗と亜理紗の家族は助けてくれた。

弁護士のお父さんは私のために財産も入るように色々してくれた。お婆ちゃんが私名義で作ってくれていた通帳を預かってきてくれた。頼りがいのあるお父さんでいいなって思った。

住む場所も探してくれて、今だに連絡をくれる。亜理紗は両親をうざいって言うてるけど、私はいいなって思う。

亜理紗も1人暮らしを始めて私たちの生活は別々だけど、たまにこうやって会うのがいい。私たちの関係はこれくらいでいい。

今は親友だと思っている、亜理紗もそう思ってくれてるみたいだし。

「ちかさ、あんまり口出したくないけど、雄樹君となんかあった？あのワンマン以来ライブ来ないし、雄樹君も心配してるみたいだよ？」

「なんもないよ。最近忙しくてなかなか帰れないんだよな。」

「じゃあ、何で雄樹君に連絡しないの？けんかでもした？ヒロトもなんかあったんじゃないかって心配してる。雄樹君もなんも言わな

いじ。」

「だって何も無いもん。やっぱりああ言う所は私は苦手みたい。さっ
っ食べよ！」

亜理紗はそれ以上聞いてこなかった。でも今回ばかりは不満そうだ。

やっと内定をもらった仕事。大手とは違うがアパレル会社に入社した。

この秋の人事異動で販促部という所に異動になった。ただの内勤だったあたしがなんで??? と思った。

新しいブランドの立ち上げに参加するみたいだが、こんなあたしでいいのだろうか？

上からの命令だから逆らう気はないけど失敗はできない。

一ヶ月ごのスタッフミーティングで理由が明らかになった。

「お疲れ様です。今回集まっていたいた皆さんは会社の中から選ばれた人達です。」

私、海老澤雄樹はこのブランドをなんとしてでもわが社一のブランドまで育て上げたいと思っています。

私も精一杯やりますので、皆さんも力を貸してください。」

新しい上司は雄樹君だった。

なん・・・・・・・・・・で？

冷静を保とうとするけど顔が引きつる。どうしてうちの会社に？

考えてる間に自己紹介の順番がやってきた。

「あの・・・営業二課から配属になりました松原ちかです。販促に
関しては全くの初心者なので、皆さんの足手まといにならないよう
がんばります」

雄樹君がこつちを見ているのがわかる。あたしは目をあわせられな
い。

一通り挨拶も終わって、みんなで部署の大掃除が始まった。
あたしも持ち物を新しいデスクに片付ける。

「松原さん始めまして。あたしプレスからきました山木です。席も
隣だし宜しく願います。」

声をかけてきたのは可愛い女性だった。いかにもプレスって感じで
指先にまでおしゃれに抜かりがない感じ。

「宜しく願います。あたし異動とかはじめてで・・・」

「あたしもだよ。いきなりの辞令だったから焦ったけど、新しい
ブランドの立ち上げにかかわれるなんてラッキーだよ！
がんばろっね。」

はい。とだけいってお互い掃除をはじめ。

「松原!!」

いきなり名前を呼ばれてびっくりした。振り返るとゴミ袋を持った
雄樹君。

「ごみだし行くから手伝って。」

嫌だ、2人になりたくない。
でもそんな事はいえず海老沢部長に駆け寄る。

「あたし1人でいきますから、かしてください。」

重いから俺も行くと言って、すたすたと歩いてしまった。

俺は知っていた、ちかちゃんが同じ会社にいる事も。

ブランド立ち上げに伴いスタッフ選びは全部俺がした。

ちかちゃんは部署の推薦人事のなかにいた。

その時はさすがに焦った。まさかちかちゃんが同じ会社で働いているなんて思いもよらなかった。

これはやったと思ってすぐに引き抜いた。

でもこつちを見ようとしない。

そりゃびっくりしただろうけど・・・

あのだ。

.....

「あの。びっくりした？俺がその・・・上司になって。」

「びっくりしました。まさか同じ会社にいるなんて思いませんでしたから。でも仕事なんでちゃんとやります。

バンドの事は皆さん知ってらっしゃるんですか？」

「いや、会社には言っていないから出来れば黙っててほしいかな。」

「わかりました。元々海老澤部長の私的なことは言うつもりはありませんし、心配しないでください。」

「業務的だな。ちかちゃんはいつもそんな感じなの？」

「松原です。会社では名前で呼ばないでください。仕事ですから。」

「なんだこの他人みたいな感じ。怒ってるのか??会社ではいつでもこんな感じなのか？」

「距離があるように感じた。俺は一緒に働けて嬉しいと思ってるのに、ちかちゃんはそうじゃないのか？」

「そんな態度とるからいじめてやりたくなった。」

「ちか」

「呼び捨てはやめてください。」

「真っ赤になった。可愛い。」

「ちか。俺の名前呼んで？」

「だからっ!!海老澤部長!!」

「雄樹ってよんで？」

「ますます赤くなるちかちゃんの顔。面白い。可愛いのに困ってる。」

「ごめんごめん松原さん。早くごみ捨ていこ?」

笑いながら言うときかちゃんはや足で先に行ってしまった。

まあ追いつくけどね。

「今日親睦会するからみんなに伝えといて、強制参加だからもちろ
ん松原さんもね？」

雄樹君に言われて仕方ないからみんなに親睦かいいの事を伝えた。意外とみんな乗り気。

この部署では下っ端のあたしが準備させられて、逃げる事も出来なかった。

始まってすぐ声をかけられる。

「松原さんだよな？俺同期なんだけどおぼえてる？」

「？ ごめんなさい、人数が多かったしちよつと……」

「だよな 笑

尾崎です。尾崎直哉、俺たち下っ端同士宜しくね。」

なら親睦会の準備も手伝ってくればよかったのにとと思う。

尾崎君は同期だけどしっかりしている感じがした。人当たりがいいとゆつか、仕事もできそう。

だから今回もえらばれたのかな？ じゃああたしはなんでえらばれたの？

親睦会も男性が多いせいかな長くなりそう……でも下っ端だから先に帰ることさえ出来ない。

外い…… ばれないように私は外の空気をすいにいく。

「松原さん？」

振り返ると雄樹君……

「タバコ？俺も行く。」

バレたら嫌だから来ないでくださいと言ったのに笑いながらついてきた。

タバコ頂戴と手を出す雄樹君。嫌々ながらも渡すしかなかった。

無言のままおたがいタバコを吸う。

「あの、海老澤部長って人見知りじゃないんですか？ヒロトさんも言っていました。あんまりしゃべらないって。」

さつきもみんなと一緒に騒いでだし、今なんてあたしについてくるし。」

「ちょっと仕事から外れない？なんかちかちゃんに部長とか言われると悲しくなる。」

あれは仕事だから、トップの俺が喋らなかつたらやりずらいでしょ？あとちかちゃんについてきたのは息抜き。

なんか落ち着くんだよ。ちかちゃんって。」

ドキツとした。やばい、爆発しそう、やめて。

「ちゃんと2人で話したかったんだ。ねえ、なんで俺の事さげんの？なんかしたかな……」

悲しそうな顔で覗き込まれて胸がきゅんとした。もうだめだ、あたし雄樹君のこと好きなんだ。

確信してしまうと止まらないと思った。でも上司だし、そもそも彼

はなんとも思っていないかもしれないし。

「何もしていません。海老澤部長は何もわるくないです。だからほっといてください。」

俺は雄樹だよと念を押すようにいわれる。

「まあこの状況もそのうち慣れるよ」

彼は言い残し、タバコを消してお店に戻った。

お開きになり帰り道が一緒だった尾崎君と電車に乗る。

「俺実は松原さんの事知ってたんだよね。結構家の部署では有名だったんだよ？」

「えっ？なんでですか？？」

「可愛いのにいつも機嫌悪そうでみんな声かけたくてもかけられないって」 笑

「そんなあ！！」

「ははっ。でも今日話して何となくわかった。ただの恥ずかしがりやなんだね」

「いや、そうゆう訳ではなくて・・・」
自分のことをどうこう言われるのは好きじゃない。彼は色々聞いてくる。

彼氏とかいるの？

いません。

好きな人は？いるの？

いません

俺、候補にしてくれる？

えっ???

この人何言ってるんだ???

「候補でいいから。ね？あつ、俺ここで降りるから、じゃあまた来週。」

彼は言残して電車を降りてしまった。何を言ってるんだ???

電車を降りたら丁度雄樹君からの着信。上司だしかもう出ないわけにはいかない。

もしもし？

「尾崎となにはなしてたの？」

電話なのに後ろで声がして振り返る。
なんで？？
ちよつと怒ってるような雄樹君。

「ゆう………海老澤部長。なんで？？」

「雄樹でいいよ。俺も同じ電車なのにちかちゃん達置いていくから。」

「声かけてくださいよ。」

「やだよ、なんか楽しそうだったし俺じゃまでしょ??？」

「そんな事ありません。ってか今の終電ですよ??？だいじょうぶですか??？」

「ああ、よい覚ましに歩いて帰ろうかな??？」

「そうですね、ではお先に失礼します。」
言残して帰ろうとしたら急に腕をつかまれた。

「ごめんちょっと時間くれない？話しようよ。」

「いいですけど、お店閉まってるのでうちでよければ……。」

「いいの？じゃあお酒買ってこ。俺まだのみたりないわ。」

途中でコンビニにより帰る。

「お邪魔します。お？結構綺麗にしているんだね。」

「一応女性ですからと電気をつける。」

「ってか男だけどいいの？？こんな遅くに連れ込んで。」

「大丈夫です。さっき亜理紗に連絡したらヒロトさん連れてくるって言うてましたから。安心してください。」

当たり前じゃない、雄樹君と2人でなんて間がもたないし、なんもないってわかっててもやだ。

とりあえず今日二回目の乾杯をする。

「あの、聞いてもいいですか？」

なに？とビールを呑みながら雄樹君がこっちを見る。

「今回の人事異動ってなんであたし選ばれたんですか？ずっと事務でなんもできないのに……。」

「ちかちゃんは部署からの推薦もあったんだよ。仕事が出来て若い

子って。選んでるときにちかちゃんの写真があっぴょくりしたよ。」

「そうっすか……
あたしもビールを飲む。」

「ちかちゃんってザル？結構呑めるよね？」

笑いながらビールの缶を開けて渡してくれる。

「弱くはないと思います。外だと割りとコントロールできるとゆうか、ないですか？」

「わかるよ。ちかちゃんは外で気をはってるんだね。だから周りから怒ってるって思われるんだよ。」

「えっ？もしかして会話きいてたんですか？」

「尾崎の聲がでかかったんだよ。それで付き合っつ？」

そんな事まで聞かれてたなんて恥ずかしくて顔が赤くなる。

えび……言いかけると雄樹君が睨む。

「付き合っつつもりありませんし、雄樹君には関係ありません。」

顔を背け目が合わない様にする。早く亜理紗たちが来てほしいと思っつた。もう限界だ。雄樹君とこんな話したくない……
もし私と尾崎君が付き合っつたらどう思っつのかな？

「そういえば雄樹君は彼女いないんですか？仕事とバンドだと忙しいですよね？」

「だね、まあいないけどね。でも今気になる子はいらんだよ。多分今は絶好のチャンスってやつだと思っただよ、ちかちゃん。」

テーブルを挟んで雄樹君が顔を近づけてくる。

「なんか尾崎と話してるちかちゃん見てたら年甲斐もなくいらつとしちゃったよ。」

「ねえ、俺も彼氏候補にしてくれる？」

真剣に見つめる雄樹君。その目に吸い込まれそうで思わず目をそらした。

「あははっ。嘘だよ 笑」

くしゃくしゃと私の髪をなでる。からかわれているけどその手が心地いい。

「亜理紗たちまだですかね……」

話題を変えたくて話をそらす。

「来ないよ？俺さっきメールしといたから。」

ええっ???

しれっと言う雄樹君

「だってちかちゃん誰かいると俺と話してくれないし。今日は2人

で、何もしないから安心して。ね？」

とっさに携帯開いたら亜理紗からメールが来ていた。

・雄樹君とラブラブみたいだし今日は楽しんで 私たちは邪魔しないからごゆっくり・・・

はあく。ため息をついてこの状況をどうすればいいか考える。仕方ない、結城君を泥酔させて朝になるのを待とう。あたしはとりあえずお酒を勧めた。

「ううう　もう呑めないよあ・・・」

先にギブしたのは私。それを横目に平気な顔をしながらビールを呑む雄樹君。

無理すんなと馬鹿にした笑い。　ねえ、雄樹君は私のことどう思ってるの？

聞きたい、でも私にはそんなゆっきない。　負けじとビールをあおる。

「ちかちゃん大丈夫？俺と張り合うなんて思うなよ？まあそんな所も可愛いけど。」

「雄樹君はいつつもそうやって女の子にちょっかいだすんですか？そりゃあそんな顔で言われたらみんなコロッと言っちゃいますよね。」

「ちかちゃんはコロッと喋ってくれないの？」

「私はそんなの引つかりません。でも会社でも海老澤部長は人気みたいですよ。山本さんも言っていましたし」

酔っ払っていらぬ事まで言ってしまった。もうどうにでもなれだ。

「一応ちゃんと言つとくけど、好きな子にそんな事言われたら俺だつて傷つくよ?」

腕を引つ張られてぎゅっと強く抱きしめられる。

ええっ???

「すぐには言わない。でも尾崎みたいに候補とかは嫌だから。俺ちかちゃんの事好きだから。」

今だつてやばいわけですよといつて固まった私に最高の笑顔を向けてきた。

あたしこそやばいです。

今日は帰ると言残して彼は家を出て行った。

俺、何やってんだろ……
弾みとはいえやばいだろ。もしこれでだめだったら……

でもあの時はそんな事考える余裕なかった。今になって後悔が押し寄せる。

あの時はじめてあつたちかちゃんに一目ぼれしたんだと思う。

初めてライブハウスに来たのだろう不安そうな感じもすごく可愛いと思った。

打ち上げのときに馴染めなくて、外に出たときの警戒して気の強そうに見せてる感じとか、

話しても他人行儀で会社でもつんつんしてて、でもしっかり仕事もがんばってて。

なにを見ているも彼女が可愛く見えた。

つてか寒いわ……

週明け会社でちかちゃんを見かけるが、明らかに俺を避けてる。わかりきってた事だけどやっぱり心配になる。
仕事でミスしなきゃいいけど……

思ったとおりだった。俺が近くにいると動揺して少しの事だけミスを連発する。見ているだけってのも出来るけど、このままじゃいけない。

「松原さん、ちょっと来て。」

俺からの呼び出しに目が泳ぐちかちゃん。個室に呼び出し席に座らせる。

「あの……なんですか？」

おいおい。顔がこわばってるぞ。

「あのさ、あの日の事は本気なんだけど、あからさまに避けなくてくれる？あと会社では普通にしてくれる？俺も何しようとか思っていないから。」

仕事とプライベートは別。ね？」

少しきつい言い方じゃない。としゅんとするちかちゃん。可愛いとか思ってる場合ではない。

「あの、ミスばかりしてすみません。今後気をつけます。」

「まあ気にすんなって言うほうが酷なのはわかってるから。」
「めんね。」

でもあの事はちゃんと考えといて。」

念をおすとちかちゃんの顔は真っ赤になる。

「あと金曜日の夜、空けといてね。ライブあるから。」

「え？それはちょっと・・・」

「だめ、仕事もきつちり上がってアフターライフを楽しみなさい。俺のライブでね？」

ちかちゃんの頭をよしよしと撫でる。細い髪の毛が俺の指に絡みつく。
名残惜しいけどいつまでもこんな事してられない。

「じゃあ俺打ち合わせあるから」

彼女をおいて部屋を出ると外に尾崎がいた。

「松原さんまだなかですか？」

「ああ、なんか用か？」

「いえ、さつき部長と入るのが見えて心配になって・・・」

「ちょっと注意しただけだ。お前もうつつぬかしてミスすんなよ？」

大丈夫です。俺ちゃんと仕事とプライベートは分けてますから。

にかつと笑いながら俺とちかちゃんがさつきまで2人でいた部屋に入っていた。

あいつは本気だ、そんな気がした。

松原さん？

考え込んでいた私に尾崎君が声をかけてきた。

「そんなに怒られたの？」

「いえ、大丈夫です。あたしが悪いんで気をつけます。」

だめだ、雄樹君が言う様にちゃんと割り切らないと。私は今出来る事を精一杯しないと。

それから雄樹君は必要以上に会社では私に構わらなくなった。ライブはたまに誘われていくけど、打ち上げには行かないようにした。

今の仕事には少し充実さがあつた。初めてのことはかりだけし、失敗もあるけど、何か終わるごとに結城君が褒めてくれる。私だけってわけじゃないけど嬉しかった。

誰もいないフロアにあたし1人、資料に目を通す。

「松原さん？まだ残ってたの？」

海老澤部長がまだいたみたいだ。

「はい。仕事を家に持ち帰りたくなって、でももう帰ります。タイムカードは切つてあるんで・・・」

「切らなくてもいいのに、働いた分はきっちり会社からもらわないと。」

あたしは慌てて散らばった資料をかき集めた。

「ねえ、この後ちょっと時間くれる？この前の撮影のお疲れ会しよ。」

海老澤部長に言われるがままに会社近くの居酒屋で乾杯した。

「明日にひびかない程度に飲みなね。俺、明日代休だから。」
言いながらビールを飲み干す。

「そういえば、明日ライブでしたね。」

「そう、みんな仕事してるから何時もは休日しかやらないんだけど、明日は特別。」

しかも時間早いから休みにした。」笑

バンドの話をする海老澤部長はやっぱり雄樹くんだと感じる、彼はまっすぐで芯があっていいなって思う。

「明日いけないけどがんばってください。」

ありがとう。と微笑んでくれる彼、本当の彼はどっちなのか。

「あの、聞いてもいいですか？」

「なに？」

「海老澤部長の大切なものはどっちですか？仕事？それともバンドですか？」

ずっと気になっていた。望んでいる答えはないけれど、知りたかった。

「両方とも大切だよ。ちかちゃんにはどうみえる？今後どうなるかはわからないけど、今はどっちがかけてもだめかな。」

お互いが支えあってる感じ？ちなみにちかちゃんはどっちの俺が好き？」

「えっと・・・・・・・・・・」

答えられなかった。ステージでキラキラ光ってる雄樹君も、慕われて頼りがいのある海老澤部長も今こうやってあたしと話してる彼もすべてが好きだ。

「ちかちゃん、俺と付き合わない？」

「いえ、あたしなんて・・・・・・・・今は仕事で手いっぱいです。」

苦笑いする彼

「俺はさ、初めて会ったちかちゃんも好きだし、仕事をがんばってる松原さんも好きだから。これからもちかちゃんを見ていたいんだ。」

真剣そうな目をしてあたしに話しかける雄樹君。この愛の告白は本物ですか？雄樹君もあたしと同じように思ってくれてますか？

だめかな？と聞いてくる彼になにも言えなかった。
その後は気まづくお互い会話もはずまなかった。

次の日の会社には彼はいなかった。気まずくていない事に安心した自分と、会えなくて淋しい自分がいた。

自分の恋愛経験のなさにつくづく嫌気がさすが、仕方ないのだ。私の人生にそんなものが横切るとは思わなかったから。

彼に会って今まで感じた事のない感情が芽生えた。その対処の仕方はいまだにわからない。耐えるしかないのかもしれない。

今こんな状況で彼に会っても何も出来ない。むしろ爆発してしまいきそうだ。

「松原さんボーっとしてるよ？」

急にかげられた声にびっくりした。

「どうしたの？部長がいないからってサボってるとチクるよ。」笑

「すみません。ちょっと考え込んでたみたいで……。」

「うそうそ、もう昼だから飯にいかない？」

誘われるがままに2人でランチに出かける。

彼のお勧めの場所らしい。会社からは少し遠いけどついていった。

彼の言うとおりどれも美味しくデザートまでついてきた。

「ねえ、松原さんは休みの日とかなにしてんの？」

「えっと……特になにもしてないです。家のこととか、最近
は仕事もちかえってます。」

真面目だねえと彼は笑う。

「友達と出かけたりしないの？」

「あんまり。あつたまに友達に誘われてライブに行ったりもします。」

「ほんとうに？」

彼の驚いた表情にびっくりする。

「あつ。でも本当にたまになんで……そんな以外みたいな感じ
ださないでください。」

「ゴメンゴメン。実はさ、皆には内緒なんだけどオレ、たまにライ
ブやってんの。学生時代の延長なんだけどね。」

びっくりした、でもそれを出さないように必死に隠す。

よかったら今度きてよと渡されたチラシには前に雄樹君のライブで
行った事のある場所だった。

機会があれば……もうそれしか言えなかった。

雄樹君は知ってるの？尾崎君は知ってるの？

お互い内緒にしてるから知らないかもしれない。もし知ってたら教えてくれると思うし。

「松原さんはどんなの聞くの？」

「えっと……色々です。誘われていくだけなんで」

「俺の知ってるバンドかな？なんていうバンド？」

どうしよう、ライブに行ってるなんて言わなければよかった。内緒にしてっつていわれてるのに……

「わからないんです。誘われていくだけなんで名前とか知らなくてすみません。」

ごまかすしかなかった。

「オレのバンドハイプってバンドなの。今度ライブあるから来てよ。」

にかっつと笑う尾崎君。明るく元気な少年といった感じだろうか。彼にもまたキラキラした何かが見えたような気がした。

仕事が終わってから雄樹君にメールをしてみた。

お疲れ様です。あのちよつと聞きたい事があるんですけど、ハイプってバンドご存知ですか？

メールを送ってすぐに電話がかかってきた。

「もしもし？仕事おわったの？今どこ？」

いきなり質問攻め。私の質問には答えてくれないの？

「これから帰るところです。」

「じゃあ打ち上げ来て。ヒロトもいるし、もち亜理紗ちゃんもいるから。メールの話は後でね。」

場所を教えられすぐに切られてしまった。尾崎君の事も気になったので私は行く事にした。居酒屋の前で雄樹君がタバコを吸っている。

「お疲れ、ごめんねよびだして」

「いえ、明日休みなんで大丈夫です・・・雄樹君もライブお疲れ様です。」

「あのさ、ひとつお願いがあって、オレとちかちゃんと同じ会社で働いてるの中の奴等には黙っててくれない？」

「いいですけど・・・さっきのメールのこと・・・」

それは後でと話をそらされお店の中に連れて行かれた。

中には亜理紗もヒロトさんもいて、顔馴染みといえるような人たちが色々と声をかけてくれる。私が雄樹君のお気に入りだとか彼女だとか勘違いしている人もいて、誤解を解くのは大変だった。

今日もまた始発が動きだしていた。彼らはいつもこんな感じ。雄樹君みたいに仕事をしている人もいるだろう。たふ・・・だな

送っていくと話を聞かない雄樹君と2人で少し明るくなった道を歩く。前はこの沈黙も苦手だったけど。今は心地よくさえかんじる。

彼を家に招きよい覚ましに熱いお茶をだす。

「あの・・・メールの話してもいいですか？」

「そうだったね、そもそもハイプの事は何で知ってるの？ヒロトつながり？」

「いえ、ライブにたまに行くって話をしたら尾崎君が・・・」

「ん？ 誘われたの？」

「はい・・・あの実は尾崎君もバンドやってるみたいで・・・」

「えっ？ ハイプって尾崎のバンドなの？ まさかあいつがやってるとはなあゝ」

「本当に知らなかったんですか？」

「ああ、だって会ったことないし、俺も顔塗つてると気付かれない。笑」

困ったと言って苦笑いする。

「でも、私何も言わなかったんで大丈夫です。尾崎君のライブにもいくつもりないですし・・・」

言い終わって目が合ったと思ったら。雄樹君の顔がすぐに近くにきた。

一瞬のことだった。

なにが起こったかわからなかった。でも目の前に彼の顔がある。

彼の顔はとても綺麗に整っていて、すごく優しい目をしている。ライプの時は周りを黒く塗って力強く、きつい感じにしている。両方ともとっても魅力的で……

そんな事を考えていたらまた雄樹君を近くに感じる。彼の唇が、息づかいが私をおかしくさせる。

「あの、あたし……」

「ごめん。我慢できなかった……大人気ないよな。」

「あたし初めてなんです。　すみません」

まじ??　雄樹君の顔にはそう書いてある様に見えた。

「キモいですよね」

「ごめん。そんな事ない。俺はうれしいよ」

「本気でいつてますか?この年で初めてなんて普通ならひきますよ?」

「ちかちゃんのはじめてを俺がもらえたって事でしょ?」

「まあそうですね……
正直言っていいですか？ あたし多分雄樹君のこと好きなんです。
こうゆうの初めてなんですけど、たぶんそうだと思います。」

「マジで？」

ギュツときつく抱きしめられて、さらにドキツとする。嬉しいとか
その前にこの状況にわたわたしてしまう。

「あつ、あの。あたしよくわからなくてこういう状況。すみませ
ん……」

耳元で聞こえる声がくすぐったい。人の体温がこんなに暖かくて心
地いい事を実感した。

「じゃあ、俺の彼女になってくれる？」

少しうなずいて考えた。

「彼女ってどんな感じですか？」

真剣に聞いてくる彼女がすごく可愛く見えて、思わず笑ってしまっ
た。

恥ずかしかったのだろう。

真っ赤になった彼女が膨れっ面になる。

「ちかちゃんはそのままでもいいよ。俺が大切にするから。」

彼女の華奢な体をもう一度抱きしめる。

苦しいと俺の背中を叩く彼女。もう離さないから。

以来、俺たちの秘密の関係。

俺はばれても構わないと思ったけど、ちかちゃんの事を考えると内緒にしておくのがいいと思った。

会社ではいつもどおり上司と部下。

亜理紗ちゃんにはうそはつけないと言うからヒロトにも一応報告した。他のやつらには言わないでくれと念をおした。

ライブの後の打ち上げには顔を出してくれる様になった。

でもちゃんと終電には間に合うように帰している。

会社でも必要以上に話はしないが少し不安になる。多分どうして良いかわからないのだろう。

俺とあまり関わらない様になっているのがみてわかる。

自分がこんなにも嫉妬深いとは思わなかった。

他のやつらと話しているのを見てしまうとイライラする。特に尾崎は彼女によく話しかけている。

「松原さん。もうご飯食べた？」

「いえ、まだですけど……」

まわりも俺が声をかけた事にびっくりしてこっちを見ている。

「じゃあ外いかない？今度の打ち合わせもあるし。」

断れるわけないのをわかっていて誘った。

近くのカフェでテーブルをかこむ。メールでやり取りして彼女の好きそうなお店をリサーチしておいた。案の定嬉しそうだ。

「ちかちゃんまた俺のこと避けてるでしょ。」

美味しそうにランチを食べる彼女に唐突に聞いた。すぐに赤くなる顔もかわいい。

「なんか、どうしていいかわからなくて……海老澤部長の周りにはいっぱい人がいるし、別に私は会社じゃなくても話せるし……」

彼女なりに気を使っているのだろう。そういう所は嫌いじゃない。

「じゃあ、2人の時は雄樹ってよんで？」

「無理です!!今仕事モードなんでそんな事出来ません!!」

「じゃなきゃみんなの前でちかかって呼ぶよ?あと出来ればあんまり男と2人にならないで、尾崎とかちかちゃんの事気になってるみたいだし……」

彼女を困らせることはわかっている、でも自分でも抑えられない何かがあった。

膨れっ面で口をひらくちかちゃん。

「じゃあ……海老澤部長も、あんまり女の人といちゃつかないでください。」

あたしだって……嫌です。だからあんまり見ないようにしてるのに。」

今すぐにも抱きしめたいと思った。嬉しかったのだ、同じ気持ちでいてくれた事に。

「雄樹って呼んで？」

「ゆ、雄樹くん。」

「ちか？約束したよね？君はつけないって。」

プライベートモードの彼が顔を出した。

付き合いはじめに約束した呼び捨て。

くんがつくのは嫌みたいで雄樹と呼ばせたがる。

でもかな慣れない、呼び捨てなんてほかの人にもあまりしないのに。

「ゆづき……」

呼んでみると満足げに笑ってくれた。付き合ってから難しいなと思っただ。

「今週さ、土曜日ライブなんだけど、日曜日は何してる？」

「特に……土曜日は行くつもりです。」

「そっか、じゃあ日曜日も空けといて。どっかでかけようよ。」

これってデートってやつかな。そういえば雄樹君と出かけるのって
はじめてかも。

「はっ！...」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9700p/>

私は、彼を好きになった。

2011年1月20日23時44分発行